

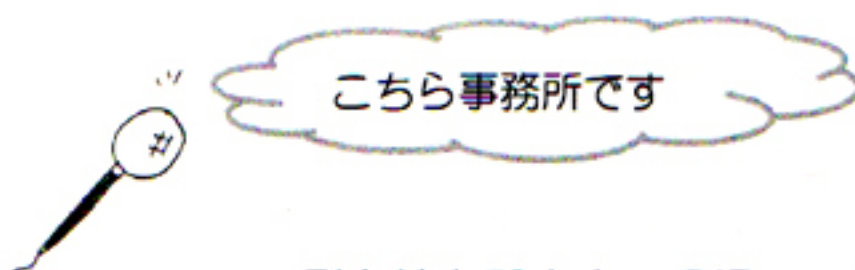
ねじりはちまき

5月 皐月 立夏 小満の月になりました。
5月1日メーデーです。2日八十八夜で、6日立夏です。
11日春の全国交通安全運動です。(20日まで。)
12日母の日。21日小満です。

爽やかな日の続く、5月節句に使われる菖蒲は、邪気を寄せ付けない魔除けの効果があると考えられていました。
菖蒲を厄除けとして軒先に飾ったり、枕の下に敷いて寝る慣わしが残っています。また菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に入ったりします。
菖蒲には打身に効果があり、湯に入ると疲れが取れます。
旧暦の5月節句の頃になると、菖蒲もよもぎもよいあんばいに育ちます。昔のようにやってみるのも、風流なものですね。

天候不順の折、くれぐれもご自愛をお祈りいたします。

幸田 常一



引き続き郡山市の現場で、住宅新築工事をお世話になっております。
また、二本松市の現場で住宅の新築工事をさせていただくことになりました。

5月1日に元号が改まり、新天皇がご即位された。新天皇は第126代目にあたる。そこで今回は我が国における天皇をめぐる歴史をざっと振り返ってみたい。とはいっても、短文の中ではいささか粗雑になるかも知れず、そこはお許し願いたいと思う。

我が国の天皇は第一代の神武天皇から始まるが、これは神話時代の天皇であるとされ、第14代までがそうである。建国神話は古い歴史を有する国ではどこの国にもある。我が国の最初の歴史書である「古事記」や「日本書紀」には神話時代のことが記述されている。ところで、その歴史書には第一代から「天皇号」が冠せられているが、実は大和朝廷が誕生して以来「大王（おおきみ）」と称されていた時代が続き、第40代天武天皇の時代（673年～686年）から使われたのが真実らしい。そして「古事記」や「日本書紀」が編纂撰上されたのは、それぞれ712年、720年（奈良時代は710年から・平城京へ遷都）のことである。律令（刑法・行政法）の制定・国史の編纂・長安（唐の都）を模した造都は天武天皇の悲願であった。伊勢神宮の祭祀も天武天皇が重視し、本格的に始められたという。伊勢神宮には皇祖としての「天照大神」が祀られている。皇位継承を争う形での672年の「壬申（じんしん）の乱」の経験も踏まえて皇位の安定のためにいろいろ手を打ち、また百済（朝鮮半島）での「白村江の戦い（663年・倭国が唐に敗れる）」以来「唐」との関係を常に念頭に置いて国づくりをし、それが持統天皇・文武天皇・元明天皇にと受け継がれる。文武天皇の時代、大宝律令の制定（701年）を踏まえ、702年の遣唐使使節に「倭国は国号を日本と改め、律令国家として生まれ変わった」と唐の皇帝に言わしめた話は有名である。この時「日本国」という国号が対外的に初めて使われたという。長安を模した造都は、藤原京そして平城京（元明天皇の時遷都）へと受け継がれ、実現した。

さて皇位は安定するかにみえたが、第41代の持統天皇の時代から藤原不比等が実力者として台頭してくる。不比等は乙巳（いっし）の変（645年）で中大兄皇子（後の第38代天智天皇）と共に蘇我入鹿を暗殺した藤原鎌足の次男である。やがて藤原家は天皇に娘を入内させ、姻戚関係を持つようになり、摂関政治（摂政や関白などの要職を占め、政治の実権を握る）への道を開く。律令時代の天皇親政の形態は姿を消していく。この摂関政治は第56代清和天皇の時外祖父の藤原良房が人臣初の摂政（886年）となって確立する。これが平安時代に続くことになるが、関白が頼通から教通に移行した時（1067年）、藤原家と疎遠な第71代後三条天皇は自ら親政を行うことを鮮明にされる。その後白河天皇・白河院政（天皇三代に亘る）を通して政治の実権を掌握するようになり、紆余曲折を経て摂関政治は終焉に向かう。一方で台頭してくるのが、武家平氏である。平氏は白河院政の頃から注目されて重用を受けるようになり、鳥羽院政にも引き継がれ、次第にその政治力を拡大し、平清盛の時太政大臣に就き（1167年）、平安時代末期に平氏全盛を迎える。清盛は後白河法皇（天皇五代に亘り院政を執り行う）と確執する中、第81代安徳天皇（娘徳子が生母）の即位にこぎつけるが、程なく劣勢に立たされ、法皇の追討命令を受けた源義経らの軍によって壇ノ浦で平氏は滅ぼされる。7歳の安徳天皇は清盛の妻時子に抱かれて入水し、悲劇的最後を遂げられた。1185年のことである。

時代は武家政権である鎌倉時代へ。鎌倉幕府を開いた源頼朝は1192年、第82代後鳥羽天皇から「征夷大將軍」に任ぜられる。征夷大將軍とは朝廷の官職の一つで、日本最高の権力者の位置づけである。この官職は鎌倉、室町、江戸幕府へと大政奉還まで675年に亘って続く。武士も天下に号令する上で朝廷の官職にはこだわっていた。豊臣秀吉も征夷大將軍には就かなかったが、公家職にこだわり続け、ついに関白宣下を受けている。

ここで「南北朝時代」のことについてひとこと。鎌倉時代の後半の半世紀に亘って京の北朝と吉野の南朝と朝廷が併存し、両朝に天皇が並立（南朝4代・北朝5代）する不幸な

時代があった。第96代後醍醐天皇が政治的に追い込まれ（天皇親政の失政）、京から吉野に移られて南朝を樹立された（1336年）。これに対して足利尊氏は北朝の天皇を擁立して、室町幕府を開く。1392年に至り第3代将軍足利義満の条件提示により両朝の合一が実現し、南朝第4代後亀山天皇から北朝の後小松天皇（第百代目）に譲位されたのである。

次の時代へ。豊臣秀吉の天下統一から徳川家康による江戸幕府開闢の時期に在位されたのが第107代後陽成天皇である。秀吉と家康では天皇に対する対応が大きく異なっていたという。秀吉は天皇を尊重して礼を尽くしたのに対し、家康は天皇の意向に必ずしも従わず、高圧的態度であった。家康は征夷大將軍に任ぜられても変わらず、朝廷への干渉を強め、ついには「禁中並公家諸法度（はつと）」が定められる。将軍秀忠の時、家康は大御所として署名している。この諸法度はその後江戸時代中に改められることはなかった。こういった不遇の中で、第112代霊元天皇の時天皇はしばらく絶えて行われることのなかった大嘗祭を始め朝廷行事の復活に意を用いてそれを実現し、朝廷の面目を一新したのであった。しかし、江戸時代の天皇の存在感は全体として希薄とならざるをえなかった。

こうした中で、幕末になると天皇を政治的に擁立する「尊王論」が広まってくる。それが「尊王倒幕」となり、あるいは「尊王攘夷」と結びつく。天皇との関係では、第120代仁孝天皇の時設置した学問所には多くの尊王論者が集まったという。幕府が開国を迫られた時の天皇は第121代孝明天皇であった。孝明天皇は開国反対の「攘夷」の立場であり、「倒幕」については消極であった。しかし、流れは倒幕・開国と向かっていくのである。

時代は変わり、第122代明治天皇が即位され、世は明治となる。天皇が政治の表舞台に立つ天皇親政となる。明治22年（1889年）に大日本帝国憲法（明治憲法）が發布されて、天皇は「天皇は統治権の総覧者」とされた（実際は憲法や法律の制約を受けているが）。また、軍の関係では天皇大権の「統帥権」をも持たれた。このお立場は昭和22年（1947年）の現憲法制定まで続く。平成天皇は「戦没者慰霊の旅」を続けられたが、明治憲法の下では、対外戦争が幾度となく引き起こされた。明治時代には、明治27年（1894年）に日清戦争が、明治37年（1904年）に日露戦争が起こり、大正時代には大正3年（1914年）に第一次世界大戦に参戦、大正7年（1918年）にはシベリア出兵がなされた。昭和時代に入り、昭和6年（1931年）に満州事変が、昭和12年には日中戦争が、昭和15年には南仏印進駐が、そして昭和16年に真珠湾攻撃により太平洋戦争に突入する。昭和20年広島・長崎への原爆投下によって戦争は終結する。明治に富国強兵策により不平等条約を解消し、列強に並ぶようになってからの帝国日本の進路は後世からどう評価されるものだろうか。戦争は繰り返してはならない。

昭和天皇は昭和21年（1946年）に「人間宣言」をなされる。そして現憲法の施行により「内閣の助言を受けての国事行為」と「国民統合の象徴」としてのお立場になられたのである。現憲法下での元号は昭和・平成・令和と、天皇陛下3代となったわけである。新天皇の下でも平和な世が続くことを切に願うものである。

令和元年初登山 福島県と栃木県境の藪山 男鹿岳

【今回登ろうとした山の概要】(○は日本三百名山)

男鹿岳 (○おがだけ・おじかだけ 1777m)

- ・福島県側では「おがだけ」、栃木県側では「おじかだけ」と呼ばれている。
- ・福島県側の南会津町田島の栗生沢(くりゅうざわ)集落の先から、長い林道歩きを経て男鹿岳を往復するコースを目指す。
- ・男鹿岳はうつくしま百名山には入っていないが、栃木百名山に入っている。
- ・会津側に降る雨は水無川(みずなしがわ)から大川となって只見川と合流し阿賀川を経て日本海へ流れる。栃木県側の雨は那珂川(なかがわ)となり太平洋へと流れる。関東と東北の分水嶺。

この山はかねて計画を練っていたが、夏は藪漕ぎになるので残雪期に登る山とされていて、さらに豪雨の影響で2017.8.11から、登山口に至る県道369号黒磯・田島線の林道が、落石のため登山口のかなり手前で車が通行止めとなったことなどがあり未踏の山だった。

日帰りする場合、車でどこまで行けるかが問題となる。

近くの集落までの車のナビの案内が信頼できるか？ 最短のアクセスルートであるか？ などを確認する必要がある。

〈アクセスの確認、下見〉

5月2日(木)、朝5時半自宅を出発、晴れ。東北道白河IC経由、甲子道路からはどんよりとした曇り空で時折曇になりそうな雨が降っていた。まだ冬のような感じだ。下郷町を経て南会津町田島に入り、県道369号黒磯・田島線、栗生沢集落を抜けて1kmほど行った、滝沢橋を渡ったところで「落石のため通行止」の看板があり、しっかりとクサリで防護され鍵がかかっていた。自宅から約1時間半。道路脇に山形と諏訪、金沢ナンバーの車が止まっていた。好天でないのに登っている人がいて安心する。

以前はこの先3.8km程の釜沢橋ゲートまで車で入れたとのこと。往復1時間半くらい多くかかるだろう。2日はここまで。

帰りは足慣らしに、タラの芽とコシアブラが採れる須賀川市の勢至堂峠(*)近くの山(標高800mくらい)に寄り、ジリジリと音を立てる送電線下のアップダウンのある管理用の道や林道を3時間ほど歩く。

タラの芽が少し採れたがまだつぼみのものが多く3~4日~1週間早かった。コシアブラは10日くらい早くほとんど採れなかった。連休明けにまた来ようと

思った。

(*) 旧勢至堂峠

1589年豊臣秀吉が奥州仕置きのため会津入りをした道。(以下ウィキペディア) 現在旧道は通行止め、立ち入り禁止になっている。旧道はトンネルを経由せず、ヘアピンカーブなどにより峠の切り通しを経由して峠を越えていた。旧道沿いには殿様清水、太閤道の史跡がある。太閤道は豊臣秀吉が伊達政宗に作らせたと言われる道路で現在の勢至堂峠の原形にあたる。

〈本番〉

5月4日(土)朝4時半に自宅発。順調に栗生沢集落を抜けて滝沢橋に6時前に着く。2日前とは異なり青空の下、山々の木々は新緑の少し前の文字通りもえぎ色のすがすがしい朝で、小鳥たちが元気な鳴き声で歓迎してくれた。橋のもとには既に大宮、多摩、つくば2台、宇都宮、の車が止まっていた。自分は橋の手前に車を置く。

愛妻おにぎりを食べて6:20、「通行止」の標識の脇を抜けて出発する。舗装が直されている箇所もあるがところどころに大小の落石があり、通行止めを納得する。

30分ほど歩いたところに、ミニバンが駐まっていた、70代のおじさんがガスコンロで湯を沸かしカップヌードルを食べていた。話しかけたら、釣りに来たとのこと。通行止めでよく入れましたねと言うと、「集落、ダム……」とのことで意味不明で理解できなかった。地元の車でなく水戸ナンバーだったので、不可思議だった。

以前には車で入れた釜沢橋ゲート7:15着。55分かかった。往復2時間弱余計にかかることになる。

林道もしだいに荒れてきて崩落しているところや落石・倒木、雑木が張り出していたり、修復は不可能と思われ「放棄された道」という感じだ。林道というより登山道と考えれば、こんなものかと納得しやすい。

コンクリートの橋の上に雑木が生えたオーガ沢橋(8:35着)のところで休んでいると、後続の若者4人組が休みもせずに通過していった。荷物も軽そうでしんがりは細身の女性だった。

9:00、4人組が右側の山の斜面につけられた道を登ろうとしていた。よく見ると木の枝に色あせたピンクと赤のテープが三カ所にあって、ガイドブックに

記載のゲートから登山口までの時間より短いと思ったが、良く考えもせずに4人組の後を追った。

崩れやすいが道らしき道があったのは最初だけですぐに道の踏み跡はなくなった。杉や笹の落葉が重なり、雪の重みから解放されて身を起こし始めた笹竹や雑木をかき分けて、テープや布を探しながら登って行く。ガイドブックに書いてある「藪漕ぎ」とはこんなものかと思いながら。

すぐに4人組の姿は見えなくなり音も聞こえない。20分ほど登って少し平場のところでテープを見失ってしまった。先の上方を見ながらウロウロと歩き回り、さてどんなものかと考える。ここで撤退するのも仕方がないとも思った。

重なる笹の葉の陰にチラッとテープが見えたので、また登って行く。とにかく尾根筋をはずさないように注意する。ところどころに残雪も出てきた。残雪に4人組の踏み跡があるかどうかを確かめながら進む。何度かテープを探しながら登って行くが、10:20、とうとう背丈以上の常緑樹の茂みのところで見失い、立ち往生してしまった。これ以上進んでから引き返す場合、登り口の林道に戻れるか危ないと思った。

少し休み、目印と記念に持参の黄色のテープを枝に巻き付け、写真を撮って撤退を決める。問題はちゃんと林道まで下りられるかである。

テープと登ったときの記憶、自分が意識的に着けたかすかな踏み跡をたどり、11:10林道に復帰。ホットする。

今回はここまでかと思いながら昼食を摂っていると、二人組が下山してきた。東京と宇都宮の人でスタートが同じでたまたま一緒に登ったとのこと。

一人ではルートが探せなくて無理だったと慰められた。このルートはガイドブックで紹介されているルートではないこと、インターネット上の情報や知人から教えてもらったルートとのこと。登山口はさらに林道を登った県境の大川峠にあるとのこと。そこまで言われて資料を読み直すと、確かに登山口まではさらに歩く必要があったことが分かった。

二人は軽アイゼンを着けたままだった。下山中残雪がなくなっても斜面の滑り止めにそのままはずさないできたとのこと。なるほどと感心し、山登りのことは山に来て初めて生きた使える知識が得られる。

11:45、彼らが出発してからゆっくりと下ろうとしたが、まだ12時前で、歩き足りずこのまま下るのがもったいない。今回の山行を下見と割り切って、大川峠登山口を確認すべきと思い、二人とは反対方向に林道を上ることにした。往復1時間半くらいだろう。

30分くらい歩いたところで一人の熟年男性が下ってきた。大川峠から男鹿岳山頂を往復したとのこと。時間的にこれから山頂往復は無理ですよと言われた。

男鹿沢橋を渡り白糸橋の山側には細い糸のような滝が流れていた。途中で山の端が開けて展望の良いところがあって、青空の下、田島の七ヶ岳(〇ななつがたけ 1636m)と思われる景観や別の場所からは那須連峰かと思われる白い峰の連なりが見渡せたがきちんと同定できたわけではない。さらに登って行くと残雪が多くなってきたが緩んでいるのでアイゼンを着けるほどではない。

12:45、藪漕ぎ登り口から1時間かかかって県境の登山口に着く、標高1250m。ここも登山口の看板などはなく、赤布の目印があるだけ。広い駐車場跡地があり、かつてはここまで車で来ることができたのだ。

下山したばかりの5人の人たちがいて、リーダーと思われる人に笑顔で、登るときにすれ違った人ですね、山頂で会えなかったのが心配してましたと言われた。よく見るとそのうち4人が、自分に先行して藪の急斜面を登って行った若い人たちだった。山頂を踏んで縦走して大川峠の登山口で下山してきたのだ。

4人と一人は知り合いだったらしく山頂で一緒になったとのこと。話を聞いたら、彼らは無料のYAMAPというGPSアプリを使って登った情報などを交換している仲間らしい。彼らはGPSでルートを確認しながら藪漕ぎの急斜面を登ったとのこと。また4人組はトレラン仲間とのこと。さすがについて行けなかったわけだ。

自分が途中で引き返したことは正解だったのだろう。

13:00発、1時間で藪漕ぎルートの登り口まで戻り、釜沢橋ゲート15:10を經由して通行止め標識のある滝沢橋を渡り、16:10車に着く。

10時間弱の山歩きを終える。いろいろと学ぶところの多かった山行だった。男鹿岳には、次回は前夜車中泊し県境の大川峠登山口から挑戦したいと思う。

ただ、途中撤退したのが口惜しいので、必ずGPSを使って藪漕ぎルートでの登頂をやりたいと思っている。

<会社近況>

5月に入りました。
暖かくて、気持ちのよい日が続いていますね。
夏日のように気温が高く日差しが強い日もあるので、すでに肌がちくちく
ピリピリします。

5月の大型連休も過ぎて、私共も7日から仕事を開始しました。
郡山市の現場で住宅新築工事をお世話になっておりますが、まもなく二本松市
の現場も開始させていただきます。
たくさんの方々にお世話になって、私共も頑張らせていただいております。
今後共、よろしくお願いたします。

☆☆☆お知らせ☆☆☆

5月19日(日)～5月20日(月)は、社員研修の為、
お休みさせていただきます。大変ご迷惑をおかけいたします。尚、
21日(火)は通常通りの営業ですので、よろしくお願いたします。

おいしい♥5月
「グリンピース」 ^ _ ^

さやから出したばかりのグリンピースは香りもよくておいしいですね。
食物繊維が多く、余分な脂肪分を体内に吸収することを防いでくれます。
野菜だけど豆でもあるので、たんぱく質も豊富に含まれています。
グリンピースごはんやポタージュ、チャーハンや肉じゃがに使ったり、
コロケの具にしてもおいしいです。色々なお料理が楽しめますね。

.....

令和元年5月5日 発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話 0243-44-3816

<後記>
平成、と書いてはハッと気付
いて訂正。次の日もまた平の字
を書いてしまっている私ですが、
令和もねじりはちまきをよろし
くお願いたします。(事務員k)